

白石蛍の作戦

翡翠 「黒岩さん、聞かせてください。まだ私が犯人だという推理に変わりはありませんか？」

黒岩 「そりゃあな。俺が犯人でなきゃ、お前が犯人だ。怪盗ホープはお前に変装して展示会場へ入り込んでいたのさ」

翡翠 「つまり、予告状は本物だと」

黒岩 「最初にもそう言ったはずだが？」

翡翠 「なら——こっちの方は、うっかり本音が漏れてしまったんですか？」

翡翠の言葉にあわせて、堇青がスマホを掲げる。スマホから流れるのは、堇青との通話越しに刑事・白石が録音していた黒岩の声だ。

——犯人がどうして怪盗ホープを騙ったのか、偽の予告状を出したのかはずっと気になっていたが——。

刑事達がざわめき、黒岩は頬を引き攣らせる。

翡翠 「どうして黒岩さんはこんな矛盾する主張をしたのか？ それは——」

翡翠が決定的な言葉を口にしようとした——その瞬間。

唐突に停電が起きた。昼間なので一寸先は闇、というほどではない。だが急な明暗の差に、刑事達の間に一瞬の隙が生まれた。

薄暗闇の中に、ぐわ、という何者かの声が響く。

それからすぐに明かりが戻ると、いつの間にか玄関扉のすぐそばに移動した黒岩が、日長と月長に取り押さえられていた。

日長 「尻尾を出しやがったな、黒岩。いや——怪盗ホープと呼ぶべきか？ 隙があればとっさに逃げ出しちまうのが泥棒の性なんだろうが、残念だったな。今のは俺達の仕掛けの罠さ」

月長 「事件のときに使われた、停電発生装置。同じものを、検証のために買っていたんです。さっきの停電はそれで起こしました」

黒岩を告発したうえで、あえて逃げる隙を作ることで黒岩に行動を起こさせる。それが白石が提案した作戦だった。

逃げ出そうとした黒岩のことを、もはや庇^{かば}おうとする刑事はいなかった。動揺しつつも、兄弟から黒岩を引き取り、手錠を掛けて連行していく。

その背中に——日長が声を掛けた。

日長 「待てよ。怪盗ホープの正体はわかった。だが、まだ俺達の事件は終わってない。ここまで来たら最後まではっきりさせようぜ。なあ、翡翠？」

翡翠 「うん、私も疑われたままで終わる気はない。だから、少しだけ時間をください。黒岩さんが怪盗ホープだと明らかになったことで、状況は変わったはず」

翡翠 「改めてこれまでの推理を検証すれば——今度こそ犯人をただ一人に絞^{しぼ}り込むことができるはずです」

▽推理カード「〇〇犯人説」に誤りが含まれる場合、その誤りを指摘することで、推理を否定し改めて潔白を示すことができる（今までのように直接潔白を示す必要はない）。まずは犯人説を確認しよう。

▽捜査&議論（フェイズ5）を開始する。